

①臨床教育学の外国語学習への応用研究-複言語・複文化プロジェクトのイベント（青森県・弘前市）を通して

②地方学生と首都圏の学生との異文化受容の差異を知るためのディスカッション

総合政策学部2年 所めぐみ

本稿は、複言語・複文化プロジェクトの一環であるフランス×弘前プロジェクトにおける國枝研究会の活動の成果を報告する。報告を明確かつ効果的に行うために本活動のプロセスを準備、活動、考察の三段階に区分して述べる。

まず準備は、実際の活動の質を高める上で欠かせないプロセスであった。

具体的には、本活動の目的設定と國枝研究会がこれを行うことの意義の検討、それらが的確かつ十分に実践され得る企画の立案を行った。

本活動の目的設定は、弘前市と市民、弘前大学が抱える他文化接触に関する問題を、同市民のメンタリティやライフスタイル、行政の教育観とその影響等の様々な観点から発見し、仮説として提起することから始まった。

弘前市民に共通したメンタリティは世間一般や、昨年同プロジェクトに参加したメンバーの情報から内向的であると分析した。また、多くの市民がその生涯を同市もしくはその近辺で過ごすことから土着性が高く、多文化接触の機会が少ない土地であるという認識、同市に存在する唯一の国立大学である弘前大学が、文部科学省が国立大学の組織改革案として示した指針(教育養成系、人文社会科学系の廃止や転換)の影響を強く受けている大学の一つであるとの認識を共有した。

これらの認識をもとに、弘前市を、多様性という意味でのグローバル化とは異なる風土をもつ場所として仮説的に定義するとともに、今回のイベントを、この町にフランスというひとつの異文化接触の機会をもたらすことを本活動の目的として設定した。これらの認識の共有と仮説の提起、目的設定が企画立案の基礎となった。

同研究会は多言語学習と学習者への臨床を研究している。このような研究会のメンバーが馴染みのない弘前という、異なる言語や文化で構成された土地において多言語や多文化との接触を、非構造化インタビューという方式を採用することで研究対象との距離を密接に保ちつつ、自由な発想とその個別性に触れるということは、平常の研究の社会への還元と、理論の実践という点において、実に同研究の本質を的確かつ十分に捉えていると考えた。ここに同研究会が本活動を行う意義を見出し、これを活かすことで企画を完成させた。

以上の準備に関するプロセスによって、本活動と対象に対するメンバーの共通の認識の基礎が形成された。

何故我々が何故弘前でこのような活動を行うのかという問に対しての認識が各メンバー内に醸成され各人が自文化を維持しながら対象の文化に適合し、円滑なコミュニケーションで非構造化インタビューを行う準備になった。

続いて二日間に及ぶ活動自体に関する報告を行う。第一日目のマルシェでは「グローバルな窓」というタイトルで休憩所を設置し、来訪者に対して異文化接触に関する半構造化インタビューを行った。この活動では仮説では知り得なかった知識が体験によって獲得された。

準備の段階で内向的であるとされたにもかかわらず、スタンドを訪れる人々はコンスタントに続き、想像以上に幅広い層の参加者との対話をすることができた。店頭で慶應グッズの無料配布を呼びかけたことで来訪者の注意が喚起され、リラックスできる空間で本活動の目的に触れながらインタビューを行うと、参加者の多くが異文化受容に関しての見解を人生経験から積極的に語っ

てくれるなど、内向的であるとの予想に反して弘前市民が実はコミュニケーションに強い喜びを感じていることが発見された。インタビューは各メンバーが来訪者とマンツーマンで行った。

会話は所謂世間話から始まるも、来訪者は自然に同研究会メンバーと自分に介在する異文化性や共通性を感じ取り異文化受容に限らず広く思考を触れ合わせる機会になった。参加者の多くがフランスに代表される国レベルの異文化や東京という都市としての異文化に強く興味を示すだけでなく、我々が弘前に訪れてこのような活動をしていることに感謝の意を表すなど、仮説として予測されていた程の土着性や閉鎖性は感じられなかった。この活動を通して様々な層の弘前市民と異文化接触と異文化受容における喜びを共有することができ、我々自身だけでなく、彼らの中の異文化に対する興味を喚起させることができたと考えている。

また、企画段階では高校生をメインターゲットに据え広報活動も行ったが、イベント自体に訪れる高校生がほとんどおらず、来年に対する課題も得た。

次に第二日目での弘前大学の学生とのディスカッションにおける成果を報告する。ディスカッションでは他言語を学び始めた理由を自らのライフストーリーをたどることで言語化し、共有した。

「国立・地方」と「私立・都市」のように、異なる背景を持つ者同士が共通のテーマに対して互いの考え方や価値観に関して臨床的に意見交換を行うことで、多文化や多言語に対する認識の新たな側面を互いが再発見する機会になった。また、これらの学問を学ぶ動機や、学習に関する喜びに対しては共通した認識を持っていることも確認したことで文化の個別性と普遍性を具体的に実感することができた。

ディスカッションのテーマは「他言語を学び始めた理由」から始まり、最初はそれぞれ個別の体験を話すだけではあったが、2時間をかけて、それらの体験から共通性も引き出され、最終的には多文化共生に関してまで触れることができた。

最後に活動後の考察に触れることで本活動の成果をまとめる。

活動の考察は研究会の時間を用いて活動全体の振り返りと各プロセスに対する見解を共有することで行われた。多くのメンバーが活動発足時では分からなかった今回の活動の価値を、各プロセスにおいて思考していく過程で獲得していき、異文化受容にとどまらず、学習の方法を再考することにつながった。また、異文化接触の際のステレオタイプが解消されていくプロセスを体感できたことは大きな成果であった。内向的であると仮説的に予測された弘前市民も、外部者としての我々との関わりの中で外交的な姿勢を見せたり、と実際身をもって体験しなければ獲得できない多くの学びを得た。

このように様々な経験から臨床や複言語や複文化を実際に体感し、研究内容に対する再認識を行うことができたことを成果のまとめとする。